

## シューマンの室内楽

ライブツィヒ時代のシューマンにはひとつのジャンルを集中的に作曲する傾向があり、例えば「**幻想小曲集 op.88**」が書かれた 1842 年は、室内楽作品が集中的に生まれた「室内楽の年」と言われる。ピアノ三重奏のジャンルではシューマンにとって最初の作品だが、繰り返し改訂が加えられ、4 曲からなる「幻想小曲集」というタイトルで出版されたのは、ピアノ三重奏曲第 1 番や第 2 番よりも後の 1850 年であった。

1851 年秋、シューマンはヴァイオリン・ソナタを 2 曲続けて完成させた。「**ヴァイオリン・ソナタ 第 1 番**」は、9 月 12～16 日という短期間に一気に呵成に書かれた。全 3 楽章からなり、第 1 楽章はソナタ形式の「情熱的な表現で」(アレグロ・アパッショナート)、第 2 楽章はヴァイオリンの優しい旋律に始まるロンド形式のアレグレット、第 3 楽章のソナタ形式による「生き生きと」(アレグロ・コン・ブリオ)では、コーダで第 1 楽章の第 1 主題が回想され、全体の統一が図られている。

「**幻想小曲集 op.73**」は 1849 年に作曲された。もともとはクラリネットとピアノのための作品だが、今回はヴィオラとピアノで演奏される。「繊細に、感情を込めて」と指定のある第 1 曲は、情熱を秘めた内省的なフレーズで始まる。第 2 曲「活発に、軽やかに」では、テンポをあげてロマンティックなメロディを聴かせる。第 3 曲「急速に、燃えるように」は、たびたび現れる、急峻なテンポで上昇するモチーフが印象的。後半は、第 1 曲・第 2 曲のテーマを絡ませながら、華やかなフィナーレを築く。

「**ピアノ五重奏曲**」は、シューマンのもっともよく知られた室内楽曲のひとつで、情熱的なピアノと弦楽四重奏が丁々発止と渡り合う名曲。「室内楽の年」(1842)にわずか数週間のうちに作曲された。翌年には出版され、妻クララに献呈されている。伝統的な 4 楽章構成を採用しており、第 1 楽章はソナタ形式による英雄的な第 1 主題と優雅で叙情的な第 2 主題の対比が特徴的。第 2 楽章は葬送行進曲風、第 3 楽章はトッカータ風の情動的なピアノに先導されたスケルツォ、そして第 4 楽章は第 1 主題と第 1 楽章の主要主題を用いた二重フーガによって締めくくられる。